

他方言と接することによる母語認識の変容

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高山, 知明, Takayama, Tomoaki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050863

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



他方言と接することによる母語認識の変容

高山 知明

1. はじめに

江戸時代に入り出版がさかんになるにつれて、様々な種類の本が世の中に出回るようになった。その中にはことばに関する本も含まれており、現在、私たちが書店の日本語コーナーで目にするのと同じような、正しいことばの使い方について述べたものもある。その一つに、元禄八年（一六九五）に出版された『しちすつ仮名文字使蜆縮涼鼓集（かんなもじづかい・けんしゅくりょうこしゅう）』という一見風変わりな名前の本がある。「仮名文字使」からは仮名に関する本だとわかるにしても、その後の部分は、「蜆（しじみ）」「縮（ちぢみ）」「涼（すずみ）」「鼓（つづみ）」と、たがいに関連の見出せない四つの物の組み合わせで、そこからは本の内容を容易に推し量ることができない。まるでなぞなぞである。目を留めた人がついつい、「これはいったい何だろう」と関心を引くことを狙ったかのような表題である。

この本では、清音の「し」と「ち」、「す」と「つ」が区別されると同じように、濁音の「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」についても区別すべきことが主張されている。「蜆」「縮」「涼」「鼓」の四語、すなわち「しじみ」「ちぢみ」「すずみ」「つづみ」には、次の表のように「しじ」「ちぢ」

「すず」「つづ」の四つの清濁の対(表の横方向)が入っており、さらに、清音の「し」と「ち」、「す」と「つ」、そしてそれと平行する、問題となる濁音の「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」がこの四語から取り出せるようになっていく(表の縦方向)。読者はこの「頓智」の中身がわかるころには著者が主張する内容もすっかり了解できているというもので、題名に機知に富んだ仕掛けが組み込まれているわけである。

現在、「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」の仮名は、「現代仮名遣い」にその書き分けの目安が規定されているが、発音上の区別は存在しない(もつとも、発音上の区別が存在しないから、どのように使分けられるかが問題になる)。しかし、十六世紀頃はその音が区別される状態にあった(変化は徐々に進行していたと考えられる)、『蜷縮涼鼓集』が出版された頃は、すでに区別されなくなっ

し	じ	み
ち	ぢ	み
す	ず	み
つ	づ	み

ていたものの、正しく発音し分けるべきとの意識がまだ残っていた時期である。つまり、当時は、今日とは違って、読者の側もその発音に対してそれなりの関心があったということである。実際に、『蜷縮涼鼓集』以外にも、その音の違いを説く同時代の文献が複数現存している。

本稿筆者は、高山(二〇一四)において、この書の内容がどのように形成されたかという問題と、その背景について詳細に論じている。本稿では、その際に取り上げなかった方言の問題に焦点を当てることにする。右に述べた「じ」「ぢ」「ず」「づ」に関する主張は、京都のことばについて

てなされたものであるが、著者がその主張を展開する中で、実は、他の方言との対比が重要な役割を果たしている。このことを、我々の研究課題にある「言語文化の接触による変容」というキーワードに照らし合わせると、異なる方言に接することによって、自身のことばに對する認識がどのように変わっているか、という問題になる。そこで、ここではこのような立場からあらためて『蜷縮涼鼓集』の内容を読み解くことにする。

なお、論じるに先立って二つの点を予めことわっておく。

第一点は、本稿の題名にある「母語認識」の「母語」についてである。この文献の著者は「鴨東藪父」という筆名のみで、人物に関してはそれ以上のことがわかっていない。「鴨東」からは鴨川の東に居を構えていたらしいことがわかるが、本当のところ、彼が京都方言の母語話者であったかどうかは明らかではない。そのため、厳密には母語に對する認識という問題設定がこの場合に適切でない虞がある。しかし、彼の主張は自らも含めた京都人への訴えかけという姿勢で貫かれており、京都方言を母語とする人々に向けた内容になっているのは確かである。他者の方言との対比を通して、彼にとつて最も身近な京都のことば遣いがどのようなようにとらえられているかを問題にするかぎり、支障は生じないと考える。そこで、「母語認識」として論じることにする。

もう一つは、「接触」についてである。「言語接触 (language contact)」（方言どうしの「接触」も含まれる）は、異なる言語・方言が混在して使用される状況が社会的に存在し、その圏内において言語習得が行われた結果、それらの言語・方言の特徴がまじりあい、さらに構造面にも変化

が起こるような事態を指すことが多い。要するに、異なる言語・方言どうし（ないし、それらの話者どうし）が出会う、接するという文字通りの意味ではなく、専門用語としては特別の意味で使う習慣がある。本稿では、そのような言語どうしの濃密な交渉を論の対象にするわけではないので、誤解を恐れて「接触」は避ける。本稿の題名を「他方言と接することによる」としたのもそのためである。もちろん、我々の研究課題名にある「言語文化の接触」はより広い意味を持たせたものであり、本稿がその趣旨に従った内容であることは揺るがない。

2. 音の変化の概要

まず、「じ」「ぢ」「ず」「づ」に関わる音の変化がどのようなものであるかを確認しておこう。まず十五世紀末（一四〇〇年代末）にさかのぼる。方言によって状況はかなり違ったと考えられるが、残された文献からわかるのは、当時の中心地である畿内に限られる。代表的な資料としては、中国や朝鮮で出された日本語の教材が挙げられる。紙幅の都合上、具体的な内容に立ち入ることはできないが、たとえば、朝鮮で刊行された『伊路波』（弘治五、一四九二年刊。「弘治」は明の年号）には、仮名にハングル（訓民正音・くんみんせいおん）の注音が付されており、今日と音が違っていることがそこからわかる。

この頃は、タ行の「ち」「つ」、ダ行の「ぢ」「づ」はそれぞれ [tʃi] [tʃu] [dʃi] [dʃu] のような音で実現されていた。たとえば、「土」「月」「力」はそれぞれ [tʃi] [tʃuki] [tʃikara] のように発音

されていたことになる。今日の感覚からすればそうした発音は舌足らずな印象を受けるかもしれないが、その時代の人からすると、今日の私たちの発音も同様に舌足らずで奇異に聞こえるはずである。要するに、どちらか一方が稚拙であったり手抜きした発音であるということではない。習慣の違いに過ぎず、しばしば、その習慣も変化するということである。特定の時代や方言の音に絶対的な基準を置いてとらえるべきものではない。

〔一〕 「ち」 [çi] → [ʃçi] 「ち」 [tu] → [sau]

「ぢ」 [di] → [dʒi] 「ぢ」 [du] → [dzu]

〔二〕 「ぢ」が「ぢ」²、「ぢ」が「ず」に合流（合流の結果、前者は[dʒi]↪[ʃçi]と発音され、後者は[dzu]↪[zu]と発音されている）。

これら [çi] [tu] [di] [du] の音は、〔一〕のような破擦音化と呼ばれる変化を経ることになる。そして、この後、〔二〕のように、「ぢ」「づ」についてはさらに、それぞれ「じ」「ず」との間の区別が失われていくという経過をたどる（音が区別されなくなつて一つになる現象を合流と呼ぶ）。キリシタン文献の一つとして知られる、十七世紀初に刊行されたロドリゲス『日本文典』（通称ロドリゲス大文典）には、その頃の京都では大方の人が区別できない状態にあったことが記されている。ところで、〔二〕の後、なぜ清音では区別がそのまま保たれたのに、濁音ではさらにザ行の「じ」「ず」に合流したのかという疑問が湧く。これは興味深い問題ではあるが、細かな点に立ち入って説明する必要があるので、ここでは省くことにする。

一つになった「じ／ぢ」は今日、「[ʝi:]」とも「[ʝi:]」とも発音されている。しかし、その違いによって区別されるわけではないので、現代人はこの違いを聴き取ったり、言い分けたりするのが苦手である。もちろん、「ず／づ」についても同様である。なお、『蜺縮涼鼓集』の著者は発音の仕方についても詳しく解説しており、「ぢ」の場合には舌先を上顎側に付けるように指示し（[dʝi:]の発音）、また、「じ」の場合には舌先を付けないよう指示している（[ʝi:]の発音）。そして、この違いをしっかりと身に付けることによって、区別を守ることができると説いている。

3. 他の方言に接する体験

『蜺縮涼鼓集』の著者は京都でこれらの音が区別されていないのに対し、九州では区別されている事実を指摘する。長くなるが、該当箇所に至る文脈をも追いながら、以下に引用しよう（一部の漢字を仮名や他の漢字に置き換え、送り仮名を付すなど、原文を適宜書き改めて示す。また割注部分は省く）。

その詞に因りて、その字を使ひ、その仮名にしたがひて、その音に読む。いにしへは尋常（よのつね）の言種（ことぐさ）にもその四音の分明なることは清みて呼ぶがごとくにて、又、「い・ゐ・ひ」「を・お・ほ」「え・ゑ・へ」「わ・は」「う・む・ふ」の十四字をもよく別々に言ひ分かちぬと見えたり。定家卿の時分に至りて、すでにかの十四音を呼び乱したる故に親行これを勘弁して仮名文字遣（かなもじづかひ）を定められき。されどもこの四音はいま

だ違はざりしにや、その沙汰なし。今時のごとくならば、この四つの仮名をも書き分けて定め置かるべきことなり。今、また世のくだれる故にや、吾人かく取り失ひぬるなるべし。

まず、ここには、仮名と音との関係が歴史的にどのような推移してきたかに関する著者の認識が記されている(これを、「日本語」の歴史と見なしても問題なさそうであるが、一義的には京都ないしは畿内のことばが直接の対象であろう。当時は、標準語とか全国共通語といった概念がまだ存在しない時代である)。補足しつつこの箇所趣旨を取ると以下のようなになる。

古代では、ことばの音の違いに応じて仮名があり、仮名ごとに音が違っていた。だから、「じ」「ぢ」「ず」「づ」の四音も異なっていた。現在では同じ「い・ゐ・ひ」「あい」「ある」「あひ」のような場合)などの十四字も音が違っていたから書き分けられたと考えられる。しかし、藤原定家の頃には、この十四音の違いが乱れるようになっていたために、源親行が勘案して仮名文字遣を定めた。しかし、この時点では「じ」「ぢ」「ず」「づ」の四音に言及していないことからすると、まだ乱れていなかったのだろう。もし、現在と同じような状態であったら、当然、それを定め置こうとしたはずである。その後、時代が下がって、現在のように区別が失われてしまったのだろう。

ところで、現在、研究によって明らかにされている事実としては、実際に「い」と「ゐ」はもともと「い」と「ゐ」のように異なる音を表し、区別されていた。また、「あひ」と「あゐ」も本来は音が異なっていたものが、語頭以外のハ行音がワ行音に変化したことで区別されなくなっている。そ

の意味では著者の認識は合っている。

なお、「源親行」のくだりは、その孫である源知行（行阿）が著した『仮名文字遣』の序文の中身を踏まえたものである。その書は十四世紀後半以降に書かれたと推定されており、実際、その中には「じ」「ぢ」「ぢ」「づ」「つ」に対する言及はない。その点でも、この著者が下す歴史に関する判断は正鵠を射ている。

このように論理的に順を追って述べるところにこの著者の氣質が表れているのだが、それ以上に重みを持つのは過去の状況を実感しうるような体験である。右に引用した歴史に関わる認識が、他の方言と接することによって深められている。右の引用に続く箇所をさらに見てみよう。

その証拠を挙げていけば、京都・中国・坂東・北国等の人に逢ひてその音韻を聞くに、すべて四音の分弁なきがごとし。ただ、筑紫方のことばを聞くにおおかた明らかに言ひ分くるなり。一文不通の児女子なりといへども、あながちに教ふこともなければ自然に聞き習ひて常々の物語にもその音韻を混乱することなし。文字を「もじ」、綴を「もち」などと聞こゆることは都人の葦（あし）と足（あし）とを言ひ分くるがごとし。ここに国風のしからしむるところなりといへども不思議なることなるべし。

趣旨は次のとおりである。

区別の証拠として次のようなことが挙げられる。京都、中国地方、関東、北陸の人の発音を聞いても区別されていないが、筑紫（九州）のことばを聞くと大概、言い分けられている。

文字を知らない女・子供であつても、人からとくに教わらなくとも自然に身に付けており、日常会話でも紛れることがない。「文字」は「もじ」、布の「緞」は「もち」などと、京都の人が「葦」と「足」とをアクセントの違いで区別するのと同じように言い分けている。

ここには、中国地方、関東、北国（北陸）というように具体的に各地の人々が登場する。もちろん、この著者が各地を旅した経験に基づくとする可能性も完全には排除できないが、おそらく、そうではなくて、京都がさまざまな地方の人の出入りする空間であつたことに因るのだろう。そう考えると、この記事はことばの面からも、他の地方との往来がさかんな都の様子が垣間見える点で興味深い。実際、京都ではいろいろな土地のことばを耳にする機会に恵まれていたと考えられる（詳細は省くが、京都の視点から他の地方に関することばの特徴に言及した材料は他にも存在する）。そのような体験は、京都の人たちにとっては、自分たちのことばを省みるきっかけにもなつた。

この著者の場合には、九州の状況に接することによって、古代から当代に至る仮名と音の関係に関する歴史的な認識を深める契機になつている。過去の状況を抽象的に想定するのに比べ、実際に区別できる話者との遭遇はたいへんリアルである。目の前で事実に触れるのとそうでないのでは格段の開きがある。九州方言の話者に直に接することによって、京においてもかつてはふつうに区別されていた様子を容易に思い描けるようになったと考えられる。

九州の方言に関して述べる箇所の書き出しは、「その証拠を挙げていはば」で始まっている。も

ちろん、源知行『仮名文字遣』に「じ」「ち」「ず」「づ」の言及がないというだけでも証拠になるのであるが、彼にとつては、それ以上のものが九州方言の現実から得られたということである。その目で知り、耳にできる現実の重みは論理的な推定を凌駕する。このような認識のもと、さらに京都の人々に次のように訴えかけ、その区別の必要性を説く。

(国風のしからしむるところなりとはいへども不思議なることなるべし。)これに付て、関東、鎮西(ちんぜい)の人の鼻(はな)を花といへるを聞く時は、通事あらまほしく覚ゆれどもなお苦しかるまじきにや。もとより人の千言万語をば以呂波四十七字にて書き記すことなれば、鼻と花とを仮名にて書かむ時、文字の音は同じかるべきなり。「中略」しかるに弥陀(みだ)の六字(ろくじ)に大道の陸地(ろくぢ)を付け合わせ、吉野の葛(くず)を屑屋(くづや)の軒(のき)に取り成すことは、仮名に書きても音韻に呼びても、聞こえぬことなり。誠に端(はし)・箸(はし)・橋(はし)などとして音声(おんじやう)の高低自由なる都人のこの四つの音ばかりを言い得ざらんことは最も口惜しきことなり。あに習字せざるべけんや。「端」「箸」「橋」のそれぞれの「はし」には謡本で使用されるゴマ点が付されており、京都における三語のアクセントの違いが示されている。

方言の話の延長として、都と違ふ関東や鎮西(九州)のアクセントについて触れ、「まるで通訳がほしく思われるけれども、仮名が異なるわけではないので、それはまだ許すことができる」という。しかし、弥陀の六字(「南無阿弥陀仏」の六字)と陸地(陸路、当時はいずれも「ろくぢ」と

いう)とを掛け合わせたり、葛と屑とを混同することは、仮名に書くにしる発音するにしる、ありえないことであるとする。最後には、「アクセントがふつうに正しく言える都の人がこの区別ができないのは最も口惜しいことだ」と述べ、都の人の矜持に訴えかけることで締めくくっている。もちろん、その背景には、都の人にとって自分たちのことばが最も優れたものであるとの意識があることが計算に入っている。

4. 謡曲等における発音法と方言の事実との本質的な違い

ところで、「じ」「ち」「ず」「づ」の発音法そのものは、当時の京都の日常の話しことばの中にはすでになくても、知られていた。具体的には、謡曲を謡う場合の発音法の項目の中にも入っているし、和歌の作法書にも発音の仕方を記したものがあつた。その点では『蜷縮涼鼓集』の著者も例外ではない。彼は謡曲に親しんでいたと考えられるので、なおさら、謡を練習したり演じたりする場で、その発音法に接していたはずである。実際、この本に記されている発音の解説は、謡曲における発音法の影響を強く受けている(詳しくは高山(二〇一四)参照)。

しかし、先に述べたように、方言において、現実の日常言語で区別されているという現実は、それとは違つて、はるかに大きな意味を持ったのではないかと考えられる。「一文不通の児女子なりといへども」というのは意外な事実であつたらうし、それが自然に行われているのは、謡曲で意識してどうにか修得できるものとは全く異なつてゐる。「国風のしからしむるところなりとは

いへども不思議なることなるべし」というくだりには驚きの気持ちが率直に表れている。他の方言と接した経験は、謡曲のそれとは次元の異なるものであったに違いない。

以上、『蜷縮涼鼓集』のテキストを、他の方言の事実に接したことに因る認識の変容という観点からあらためて読み解いてみた。このように見ると、他の方言に接するという体験も、『蜷縮涼鼓集』の内容に大きく関わっているといえることができる。

主な参考文献

香川大学附属図書館貴重資料デジタル・アーカイブ（神原文庫）『伊路波』

<http://www.lib.kagawa-u.ac.jp/www/kicho/iroha/iroha.html>

亀井孝（一九五〇）『蜷縮涼鼓集を中心に見た四つがな』『国語学』四（一九八四）『日本語のすがた』

（一）『（亀井孝論文集3）吉川弘文館に再録』

京都大学文学部国語学国文学研究室編（一九六五）

『弘治五年朝鮮板伊路波 本文・釈文・解題』京都大学国文学会

高山知明（二〇一四）『日本語音韻史の動的諸相と蜷縮涼鼓集』笠間書院

山田巖・大友信一・木村晟編（一九七九）

『蜷縮涼鼓集』〔駒沢大学 国語研究 資料第一〕汲古書院